

巻頭言

加藤 和人

(大阪大学大学院医学系研究科教授、医の倫理と公共政策学)

大阪大学の医学系研究科に「医の倫理と公共政策学」と名付けた教室が発足して、まもなく3年になる。この教室は、2001年に発足した「医の倫理学」教室の活動を継承しつつ発展させることを目指して2012年4月にスタートした。「生命科学・医学・医療」の発展に伴い生じる倫理的・法的・社会的課題に関する研究、および関連の政策に関する研究を行っている。教室の体制がようやく整い、「医の倫理学」が発行していた雑誌『医療・生命と倫理・社会』を、再び発行できることになった。

教室雑誌の新しいスタートにあたって、今後この雑誌が目指す方向性であると同時に、医学倫理・医療倫理の研究について思うことを、いくつか述べておきたい。

一つは、これまで以上に、医学・医療の現場に積極的にかかわることの重要性である。最近の医学・生命科学研究においては、ますます倫理的対応の重要性が謳われるようになり、政府の倫理指針についても、一部は法律化されたり、あるいは内容について再検討が行われ、改訂や複数指針の統合などが行われたりしている。関心が高まるきっかけの一部は、研究不正といった不幸な事例であることは否定できないが、いわゆる、現場の研究者・医療者の倫理的課題に関する関心は高まっている。医学・医療の現場から出ている問題意識をくみ上げ、課題を分析し、時に政策的対応を提案するような研究を、現場の研究者や医療者と関わりながら、時に共同で行うことで、机上の空論にならずに現場にインパクトを与える研究ができるであろう。「倫理」というと、これまで医学の現場では「研究の邪魔をするブレーキ」、あるいは医療の現場からは「答の出ない分野。医療関係者が自分で取り組むものではない」等々、概してネガティブなイメージがあったが、これからは「ともに考える倫理」「現場と協働する倫理」の発展が望まれる。そうした観点から、現場にいる医学研究者や医師を含む医療関係者自身が倫理的課題に取り組んでできる研究論文の投稿が増えることも期待したい。

もう一つは、国際的視点の重要性である。日本という国は大変大きく、また、日本語という独自の言語を持っているために、研究者、特に社会的課題を対象にする研究者は、すべてではないにせよ、日本国内で課題を見つけ、分析や議論を行うことで満足する傾向にある。しかしながら、「生命科学・医学・医療」の倫理的課題には、国境を越えて共通のものも多数ある。気付いてみると同じような課題について世界各地で別々に取り組んでいたということはよくあるのではないかな。そうであれば、世界の状況を意識して研究を行うほうが、より深い分析や議論ができるだろう。もちろん、科学研究そのものとは異なり、文化的・社会的背景の違いによって、課題自体もあるべき対応も、各国独自のものが多数あるのは当然である。そうであれば、国を越えた共通の部分と、各国独自の課題や対応について議論することで、ますます興味深い研究となる。

ここで述べるまでもなく、こうした方向性の重要性は次第に意識されていると思う。広い視野から意欲的に研究に取り組んでいる若い研究者の数は、10年、15年前に比べるとはっきりと増えてきている。今回の論文にもそのようなものがいくつか含まれている。本誌がそうした研究者の研究発表の場として今後も利用され続け、研究分野全体の発展に少しでも貢献できることを期待している。